

---

# 翼のされた天使

Chaki

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

翼のおれた天使

### 【Zコード】

Z2348B

### 【作者名】

Chaki

### 【あらすじ】

心に深い傷を負っている16歳の『心ここに』だれからも軽い女の子つて思われえがちで、それが原因である心に傷がつく出来ことが・・・。『愛』なんて信じれないと思っていたある日、合コンの帰りに襲われた。その時に助けてくれたのが”ショウ”だった。それがなにもかもの始まりだった。。

第1話 パパの生活

私は『愛』を信じられるのかなあ。

忘れるより想い続けたほうがかつこいいつてゆうのは

うそなの？

私も幸せになりたいよ。

—16歳の春—

今日もお母さんの声が私の耳に響く。

「ん」

今日も寝起きが悪い私。

昨日も合コンとかで寝るのが遅かった。

こんな生活はいけないとは思つけど、なんか心が満ちない感じを埋めるために

いつも遊んでた。

「 ハハ？？あんた今日から学校でしょ？」

ドアにもたれて、腕を組んでえらそうにしていていかにも、お姉さまみたいな

人は私の姉の『真紀ちゃん』

ちなみに、『ハハ』とゆうのは私の名前が『心』 HIN ってゆうから。

私は、案外このあだ名は氣に入っていた。

「 いってきまーす。」

と言つて、玄関を出た。

「 ハハ…おーはハ…」

友達のアキが待つていた。

アキとは、中学のときから一緒に仲が良かつた。

それに、アキは私の気持ちを一番にわかつてくれた。

「 おはよ。アキ、昨日ケータイに電話した？」

「 うん…わかんない」といろがあつて…。

「「めん。その時、合コンに行つてたかも。」

アキは、少し顔がこわばつた。

「やめなよー。口口は、可愛いからすぐに好きな人できるよーー。」

「もうかなあ。」

私はいつもそうやって、アキの言葉を聞いているふりをしてたんだ。  
・・。

あの時、きいてれば後悔はしなかつたかなあ。

## 第2話 ハハのアキ

独りぼっちで・・・

淋しくて・・・

涙、  
流してばっかりで。

そんな時、いつも私はずるいことを考えてた。

いふも  
優しい人を頼ってきた。・・・

たから もう、私は優しくしないで

「…今日も一緒に帰ろう?」

アキがいつものように笑顔で犬のよう私に寄つてくる。

いつも、アキは可愛いと思う。いつも笑顔で誰からも頼られて、誰でも笑顔で話しかける元気のいい

女の子。私は、そりがすゞしく可愛いと思つたが時々そこが憎いともある。

そんな私が大嫌いだつた。

「ねえ、アキ。私、忘れ物あるからちょっと待つて。」

「うん！…待つてるねー。」

アキはまた、笑顔で私を送る。でも、そんなアキのことがす、ぐ好きだった。

（あーあ。宿題のプリント忘れるなんて……。アキ待ってるのに。  
・・。）

アキが待っている場所まで走っていった。すると、アキが男子高校生にからまれている。

これは、初めてのことじやない。アキは、他校からも人気があった。

「ちょっと、アキが嫌がってんじやん。やめてくれない？」

男子高校生は、がっかりそうに行ってしまった。

「あ、りがとう……。」

アキは、子犬かのように私に抱きついてくる。

このときは、少し安心する。

でも、私はもう男の前でもアキの前でも笑顔がでなくなってしまつた。

でも、そのことはアキは痛いほど知っている。あれは、もう思い出したいくない・・・。

あると、携帯から音楽が流れる。

「はー。心ですかー。」

「あーー。ンン？？私、アイカなんだけど今日も会員いかない？？」

（今日も会員だつたし・・・いいか。）

「別に、いいけど。」

ただ単に、今日も親は仕事で朝まで帰つてこないし、これはいつものことだった。

「また、会員？？」

アキは、私を心配そうに見てくる。

（また来たよ。子犬ビーム。）

「うん。でも、大丈夫。今日は早めにかえつてくるから、携帯に電話かメールしとくから。」

「わあーーーー。ンンからメールがくるーーー。」

アキは、手をあげてピッピッピッと飛び跳ねる。

（そんなに私のメールがうれしのかなあ。せりやあ、ぜんぜんメールとかしないけど・・・。）

心はやんないとおもこながり、家に帰つた。

第2話 パパのアキ（後書き）

読んでくださいてありがとうございます！

ずっと、あなただけ信じてたのに

あなたは、私を裏切った。

あの時のせいで、私は心中おおきな傷がついたんだよ？

悪いと思つなら私のところに来てよ・・・。

「ただいま。」

私が帰つてきても、誰もいないのはわかつていた。

でも、つい声が出ちゃう。

（今日は、だいたい8時半には帰つてこようかな。）

そう思いながら、服を選ぶ。この時、いつも思うのは、私つて生きてる意味あるのかなあ、だった。

だって、いつもいつも時には呼ばれて、あんな出来事があったのにまだ、大切してくれる人を探してる。

今思えば、男が絶えた時期がないかも・・・。でも、都合のいいと

きに呼び出してお金貸してくれとかだつた。

それか、2マタされたり。なんで、私つて男をちゃんと選べないんだろう。なんか、来るもの拒まずだつたよつに思つ。

それで、あんなことがあつたのに・・・・。

私は、高校生が着なにようなすじに色氣のある服を着て、玄関のドアに鍵を閉める。

(私は、また男で幸せになつて、また心に傷がつく。)

イケナイと思つていても、体が勝手につづく。まだ、16なのに・・・。

アイカが待つていてる場所に急いだ。

「アイカ。こめん遅くなつて。」

すると、男の子4人組みが一や一やしながら、じつちを見つくる。

「ほら、そんな服着るから・・・・。」

アイカは、二三三三している。

「ねえ、君なんてゆうの?/?」

一人の男が私に話しかけてくる。

(私、この人苦手・・・・。)

「心つていいます。」

「へえ～可愛いね。みんなから言われない？？なんか、可愛いとゆうより美人だね。」

「ああ、そうですか。ありがとうございます。」

と素つ氣無い言葉をかえす。

相手がつまらないと思つたかと思つたら、逆にしつこくなつた。

また、たぶん男に慣れてる女つて思つたんだとおもつけど。。。

何回行つても、好きつて思える人が見つからない。話が合つ人もいないし。。。

いつも、それを楽しむアイカたちの氣がしれない。

だつて、知らない人と話して、もしかつーといひただつたらベット行き。。。

そんなの『愛』じゃない。心から思える人が現れるまで私は探し続けるとおもつけど。

わたし、もう16だよ？家族の愛も知らないから、早く心から愛せるひどがほしいよ。。。

すると、携帯の時計を見る。

もつ、9時だった。

（やばい。8時半には帰るつもつだったのに・・・。）

「アイカ、『めん。私、今日はかえるね。』

と上着を持ち、立ち上がりついた。

「えへーもしかして、彼氏に呼び出された??」

と一人の男が言つて、次々に言つてくる。

（もへへ、ひぬわこなあ。）

「ちがいます。」

と私は言つた。

すると、少し酔つたアイカが余計なことを言つた。

「えへー！一々嘘だあーーーだつて心、男絶えたことネイジシャンーーー！」

（アイカも余計なこと言ひなよー）

「もへへ、帰るから・・・。」

そそくさに私は、帰つた。

でも、その時嫌な予感はしていた。でも、その予感があたるとは夢にも思つてなかつた。

読んでいただきありがとうございます！

## 第4話 恋の始まり

心は、ひとけのない公園を一人で帰つていった。

正直、恐かった。こここの公園は、もう行きたくない場所だったのに。

（あの記憶は、忘れたはずなのに・・・。）

だんだんと恐怖がくる。

でも、辺りを見渡すとだれもいないのを確かめると少し安心した。

心は、公園のベンチに座りアキにメールを打つていた。空を見渡すと、星がきれいで今日は満月だった。

（きれい・・・。）

心は、携帯の画面に視線を戻した。

その時、いきなり後ろから抱きつかれた。

「...」

心は、必死になつて抵抗した。でも、案の定、男の人の力は強かつた。

（これじゃあ、あの時と一緒に！！）

心は、目に涙を浮かべた。

また、あのときの恐怖がよみがえった。心は、一心不乱にあはれた。

「い・・や助けて！」

（恐怖によお。）

すると、心は男に押し倒された。

「……」

今日の合コンのあの男の人だった。ずっと、思ひださないよつて心に閉まっていたのにどんどんその思

い出が心からあふれる。

あの時もそつだつた。私のこと見離さないと思つていたのに……信じていたのに。

あの人は私だけ置いて逃げてつた。あの思い出は、どんなに樂しいときだつて思い出すほど

鮮明に覚えている。

すると、男の人は私の首筋にすべらせる。

（気持ち悪い……。）

すると、フワッと体が軽くなつた。

私は、あの時のことは田を閉じていてぜんぜんわからなかつたけど  
「ショウ」が私を助けてくれたのは  
わかつたよ。

あの時から、私の恋が始まつていた。

第4話 恋の始まり（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

## 第5話 ショウくん

私の恋は、どんなに幸せな恋でも

最後には壊れるガラスの恋みたいなものでした・・・。

心は、体を丸めてガタガタと震えていた。

上着を頭にすっぽりかぶせて田を閉じたままだつた。

あれからどうなつたかはわからない。

「おねえさん、大丈夫?」

私は、ゆっくり顔を上げた。そこには男の姿はなく、中学生ぐらいの男のこが笑顔で私を立ち上がらせてくれた。

「君が助けてくれたの?」

私は、半信半疑で訊いてみた。

「うんーおねえさんが嫌がつてたから助けたー!」

その子は、笑顔で私を安心させてくれた。

その子は、中学生くらいの頃で黒髪でやや長め。なんか、純情やうな男の子だった。

「あ、ありがとうな。」

私は立ち上がりたけど足がまだ、ガクガクと震えていた。

「おねえさん。いい座り方…。」

じゃの子は、私の状態を見て気にいたのかベンチに座りしてくれた。

「君は、名前なんてやうの?」

「僕?僕は、ショウヒトやうんだあ。ちなみに中3なんだー。」

(へえ、せんせんやうな、まだ、みえない。)

「おねえさん?」

と私に無邪気に笑つてくる。なんか、その笑顔を見るといつもあつたことが嘘のように心が落り着く。

「私は、SHOJIやうんだあ。君の1つ年上かな?」

すると、ショウが驚いた顔をして身を乗り出す。

「おねえさん、16?..みえないねー。」

「あつがとうー。」

あると、シラウツの携帯がなつた。

「はーい……シラウです……」

シラウは、どんな時も笑顔を絶やせない子だと思つてたの……。  
。

あの時、私の心はシラウでこいつぱこだつたから、やつもつといふのは  
は、せんせん目がこいつてなかつた。

「いわんない…心おねえけやん…僕帰るね…。」

「うん……。今日は、ありがとウー。」

と少しむかしの顔をする心。

それをみかねた、シラウは心に歩み寄り自分のつまてこたマフラー  
を心の首に巻いた。

「心おねえちやんーーまた、あえるよ。」

あの時の気持ち、今でも忘れない。

心がぎゅうりと締め付けられてるよつな……。

かういへじへじへ。

ここなに、男の子を想ひつゝとななかつた。

第5話 ショウヘン（後書き）

よんでいただきあつがとうござりますーー！

## 第6話 新たな彼氏

私、また笑えるかな。

好きな人もできるかな。

私もふつつの女の子がよかつたなあ。

“ババババ”

心の目覚まし時計が鳴る。

「・・・・・」

昨日は、寝られなかつた。なんか、落ち着かなくて・・・。

ショウくんのあの幸せそつた笑顔、いいなあと思った。

でも、私はもう笑えないから。

今日は、土曜日で学校も休日だつた。

アキと遊ぼうと思つたが、アキはあいにく家族と旅行中。

私の姉は、母のあまりにも無責任で自分勝手と理由で彼氏の家に3ヶ月も前から居候しているらしく。

私はおねえちゃんしか、頼れる人がいなかつたし、お父さんもなかなか帰つてこない。

だから、家族がみんな集まる事はなかつた。

それが、小さい頃から絶えられなかつた。そんな過去にひとりながら、私はベットにもたれかかつてた。

„**ପାତାଳପାତାଳ**“

携帯が鳴る。

「せこ、心でわから。。。

いつものように無愛想な私。

「あーーーやつと、つながったーーー！」

その声は、まぎれもなく前の彼氏の声だった。

「もしかして・・・夏野くん？」

二二〇

夏野くんは、私の初めての彼氏だつた人。

たぶん、まだ好きになる気持ちがあつた頃だった。

「おれが、『』と別れた事……後悔してんだよ。だから、また・・・おれとヨリを戻さないか？」

とこきなりの告白だった。

別に「これ」といって彼氏もになかったし、じつは私も夏野くんと別れたのは相当嫌だった。

「・・・うん。クロシク。」

とひとこと呟いた。

やつ言つと電話から聞こえる夏野くんのうれしそうな声が聞こえた。

「じゃあ、また今度連絡するからな！――」

と嬉しそうに電話をきつた夏野くん。

それが、私を変えてくれるかもしれない。

そんな気がした。

私は、8時半になると家をでた。

また、合コンではない。ショウくんにマフラーを返すと黙ったからだつた。

私は、恐いけどあの公園の門の前で待つてた。

すると、人影が・・・！！

あの少し大人びた姿で、でもなんか子供っぽい・・・・そう。あのしぐさは間違いないショウくんだった。

「シヨウくん。」

(せ) ほり、なんか子供っぽい。(

「どうしたの？？」んなと「危ないよ……」

と心配するシミウくんも可愛がった。

はい。これマニアー。ありがとうございます

ときれいにたたんで、手渡した。

「ダメだよ。」

「いいの……あ……そうだあー、心おねえちゃんにこれからも逢いたい!..」

ヒカルシラヘビ

「いいよ。じゃあ、ヒマだつたら8時半へりこへるね。ねむへて

「うえ……」

と本当に嬉しそう。

私は、ショウくんと少ししゃべる」と云った。

でも、私はここまで人に話をなかつたこともショウくんには話せた。

あれは、なんでだろう……。

## 第7話 パパの過去

私は、ショウヘイさすがにむ願こされたので少しだけ話す」と  
にした。

「わあ、また心おねえちゃんと話せるな」とうれしけり。

「うれしあうなショウヘイさ。

「あのお、ショウヘイんは彼女とかいないの?」

と素朴な疑問をショウヘイさんに囁いた。

「うへん・・・付合つた人は何人もいたけど、僕から好きになつた人はいないな。」

と案外、以外な答えが返つてきた。

「へえ、ショウヘイさんか純情そうにみえたんだけどな・・・。

」

「えー!...僕は、あまつやうめうつうな」と囁かれたの初めて!...」

とショウヘイは、やけに驚いていた。

「じやあ、心おねえかや なぜだいなの?」

とあまり聞こてほしくない質問だつた。

「私ね・・・すうじく好きだつたひとがいたの。でもね・・・。その男の子は小さかつた頃の話だから覚えてないんだけど・・・誘拐されて戻つてこなかつた。誰も何を訊いても教えてくれなかつたんだ。

あの時の男の子のことを私は憎んだんだ。だつて私と幸也にならつて言つてくれたんだもん。

なのに、連絡一つくれないんだもん。」

と心の底に涙があふれた。

「心おねえちゃん・・・。」

「それから好きな人ができなくなつた。忘れようとしても思い出すんだもん。それから、私ね・・・。ずっと会員とか、彼氏作つたり・・・だから、だよね?」

「何が?」

ヒシリカくへさせ、やせじへ訊く。

「私・・・。襲われそうになつたんだ。」

下を向いてた心がシリカくんの方をみた。

「そのときは、独りだつたの?」

「ううん。 独りだったほうがまだマシだった。 そのとき、 やつと大好きになれた先輩が一緒だった。

でも、 そのとき先輩は私のことおいて逃げたんだよ？ もう、 男なんて信じなって思おうとしてたのに

まだ、 私を大切にしてくれる人探してんだよ？ バカだよね・・・。

」

心の目からは、 何粒も涙が流れてた。

すると、 ショウくんは私の頭をなでた。

（これじゃあ、 かつこ悪い・・・。）

「心おねえちゃんは、 がんばったよ。」

ショウくんの私を見る目は大人で、 なんか懐かしい目だった。

あれから何時間、 ショウくんになぐさめてもらつてただろう。

私に優しくすると、 いつもその人に頼っちゃう。

だから、 私に優しくしないでよ・・・。

私は、 それからはショウくんには会わなかつた。

## 第8話 テート

お久しぶりにあの頃の夢をみた。

私と大好きだった男の子の夢・・・。

男の子は、私と遊んでくれてるけど私のことを見てくれない。

「 ハハー ! !

アキが私の家に遊びにきた。

「あ、アキ。」

アキは、心にお土産を持つてきたりしい。

2人は、心の部屋に入り話した。

「ええ――――――！」ハハにまた彼氏が出来た？？？」

と大声を出すアキ。

「うん。初めてつきあつた夏野くん。」

「 ハハ？また傷つかないよね・・・。」

とアキは、心配そうに心の顔を見た。

（なんだ・・・アキも私のこと心配してるんだあ）

「じゃあ、私きよは帰るねー！」

「うん。ばいばい。」

と別れる2人。

でも、心には夏野と会う約束をしていた。

2人で会うのは、もう2年前になる。あの時は、まだ笑っていたのに。夏野くんとは、公園で会うことにした。その公園は、初めてデートした場所。

心は、髪をワックスをつけてクセをつくった。心の髪は、肩までのびた試しがない。

それは、心は彼氏と別れるたびに髪を切っていたからだった。

心は、支度をして家をでた。

公園は、案外カッフルが多くつた。

待ち合わせの場所に行くと、もう夏野がいた。

「あー……」

と手を振つて笑つてゐる。

「お久しぶり。夏野くん元気だつた？」

「うん。今何は？？」

「私も・・・かな。」

（私のうそつき・・・。）

私は、人に嘘つぐのが嫌だつた。

「ねえ、今何は？」「行きたい？？」

とこきなり手をこきつてきました。

（え、いきなり手つてつなぐか？）

と心は、不安になりながらだまつてついていった。

「うーん・・・夏野くんの行きたい」といひでこいよ。

と心が詰つて、夏野くんはいろいろなところに連れていた。

「ねえ、『』？」

と夏野くんがいきなり言った。

「ここは、だれもいない夜景のきれいなビルの中。

人もにぎやかだった。

「ん？」

すると、夏野くんは心に近づいてきた。

（もしかして・・・夏野くん私にキスしようとしてる？）

夏野くんは、私の肩をぎゅううとつかんだ。

すると、キスしようとした。

「...」

## 第9話 別れと新たな恋

夏野くんはキスしようとした。

でも、私にとつてはファースト・キスだ。

私は、あれだけ男と付き合つて来たのに口はあるか、キスもしたことがなかつた。

だつて、男達は全員私じゃなくてお金が田舎でのひとが多かつたから。それは、自分でもわかつてた。

高校生なのに10万とかお財布に入つてゐる女の子は珍しかつたから。・・・

でも、夏野くんはちがつた。私だけを見ててくれた。夏野くんとは、ただのすれ違いで別れただけだつた。

だから、今も私のことが好きならファースト・キスぐらいあげようとおもつたけど・・・。

なんか違う。なんか、あげたい人が違うきがする・・・。

でも、なんでそのとき思いついたのが・・・『ショウくん』だつたんだろ？。

心は、キス寸前で夏野くんをこばんだ。

「……や。」

私は、顔をそらした。

「…………」

夏野くんは私が思つてたよつやせしかつた。

「私…………」

と心は立ち上がり、夏野くんとは付き合へない。

「『』ねん……。夏野くんとは付き合へない。」

心は、去りうと思つた瞬間。夏野くんから衝撃的な言葉がかえつて  
きた。

「『』……本氣で好きだつたわけじやないし。ただ、ヒマだつ  
たから。」

と夏野くんは笑いながら心を見た。

「…………」

心は、ショックだつた。夏野くんはみんなとま、違つて思つてた。

心は、田に涙をためながらその場を離れた。

なぜか、たどり着いたのはあの公園。

「… もう、一時半。ショウくんが来るはずがないの…」

心は、ブランクに乗った。少し、ブランクをじこだ。

私の一番嫌いなところ…すべ傷ついたら、やせし二人に頼ること。

「… もう、こやになつちやうよ。ショウくん… 逢いたい。

来るはずがないのに私は、それを期待している。

「あれ？… 心おねえひやん？」

それは、今帰つてきたショウくんだった。

「ショウ…くん？」

「どうしたの？…また、なんかあつたの？」

ショウくんは私が泣いてるのを見てすぐ止みよつた。

（温かい…）

やつ思つた。

「ショウくん…」

心は、ショウくんを強く抱きしめた。

「…………」

私がっこ悪い。ショウくんだってあきれてるよ。

でも、ショウくんはちがつた。

「今から……僕の家くる？」

それは、子供っぽいいつものショウくんではなく15歳という一人の男としてだった。

## 第10話 ショウの大切な

「今から・・・僕の家来る?」

と真剣なまなざしで心をみてきた。

「・・・。」

心は、声が出る力もなく、うなずくだけで精一杯だった。

ショウくんは、心の手をやせこべにじめられた。

ショウくんは、こつもとほなせは違つ不陰氣がでてるよつな・・・。

少し歩くと、でつかれてきれいなマンションがそびえたつてこる。

「リリなの?」

やつとのことで出た言葉が「こいなの?」だった。もつとほかに言つことはなかつたのかと今も思つ。

「うふーー僕、一人暮らしだからーー。」

とこつもびのりのショウくんに戻つた。

(良かつた。ふつつのショウくんにもどつたんだ。)

ショウくんの家にあがると、なんともいえない大人っぽい部屋だつ

た。

ほんのつ明るい電灯がそつとつてゐるよつてこみえのからだつた。

「きれいな部屋だね。」

と心は、ソファーに座りながら言つた。

「やうやく…ありがと…僕、ちょっと着替えてくるね…」

と言つて、奥の部屋へ行つてしまつた。

(ショウくんの部屋、私より広いなあ。)

部屋は、物音一つしない。

心は、体育すわつをしながらクッショニンを抱いていた。

すると、奥の部屋からショウくんが出てきた。

「「あん。遅くて…！」

ショウくんはパジャマかはわからないけど、私服で出ってきた。

「うん。」

心は、首を振る。

「それで、どうしたの…心おねえちゃんば。」

シラウヘくんは、心の隣にすわった。

（どうしたの？…って今日のことはだよね…。）

「前に前の彼氏がもう一回会おうって告げられて、私にいやつて思つて口をしゃつたんだよな。バカだよね。」

この時、せつたいたいシラウヘくんは私のこと勧ましてくれることをやめていたんだ。

だから、あの時もそれを期待してたんだ。自分では、認めたくないけど。

私がシラウヘくんの言葉で傷つくなんて思つてなかつたから…。

「うそ…心おねえちゃん、同じこと繰り返して傷ついて…。」

と笑顔で言った。

（なんか…むかつく。）

ただ、シラウヘくんに本当のことを言われてなぜかはわからなこけどす「くわつかついた。

ここにこむとい、シラウヘくんにあたつちゃいそつだしなんか、自分のダメなところを言われてすく恥ずかしかつた。

心はかばんとホールを持ち、玄関に向かつ。

「どうしたの？…なんで帰るの？…心おねえちゃん？…？」

ショウくんは、心の腕をつかむ。

「来るなあーー！」

とかばんをなげると、壁にかかってた絵の角でショウくんの手のぎりぎりのところで切れた。

（ほら。ショウくんにあたっちゃった。ショウくんを傷つけた。）

心は、振り返りショウくんを泣きそうな顔で見た。

「悪かったね・・・。しうがなーじやん！ーあれだけ傷ついてもまだ探してるんだからね。そのせいで、失ったものだって

あるんだもん！ー私、ここ2年間どうやっても笑えないの！ー私だって、ふつうの恋がしたいよ。」

心は、座り込んだ。

ショウくんは、私のそばに寄る。

「やつたーーー心おねえちゃん、やつと本音はけたね！ー少し楽になつた？？？」

といつもの笑顔だった。

（もしかして・・・私のために？）

ショウくんは、私のために体をはつて私を励ましてくれた。

「の日、なぜかはわからないけどいつか笑えるような気がした。  
シラウくんとこねと、幸せになれるよいな気がした。

## 第10話 ショウの大切さ（後書き）

読んでいただきありがとうございましたーー！

## 第1-1話 ショウくんの真実

心は、涙があふれる。

「心おねえちゃんー僕、眠いからベットにこらねばど心おねえちゃん  
も眠たかったらおこでねえ！」

と笑顔でいった。

私は、いく訳がないと思った。今日は、男で傷ついたつていうの。  
。。。

でも、私の心と体は違つたみたいだ。

どそビンショウくんの部屋へと進んでいく。

ドアを開けた瞬間、ショウウは一瞬おどりいた顔をしたがまた優しい  
笑顔に戻つた。

「心おねえちゃんーどうぞー！」

とベッドのほうにショウくんはつめた。

心せ、わつわよつも子供っぽい泣き方でショウくんにしがみついた。

「ショウ・・・くん。」

ショウくんは、私をなでてあげた。

それは、なんかにつつまれているみたいな感じがした。

ショウくんは、私に布団をかぶってくれた。

「明日から、学校でしょ？ 心おねえちやんは風邪ひいやダメだよー。」

と優しい心遣いだった。

「ねえ、少しお話しちょーー。」

ヒシリウくんは、右手をあげて言ひ。

「いじよ。」

「ねえ、心おねえちやんは。。。。」

と言つと心は、人差し指をショウくんの口にあててゐる。

「心おねえちやんじやなくて、心でいじよ。」

いつも時、普通は笑顔で言つのが理想だと思つんだがどうせぱつ  
私の顔は冷めてるのがわかる。

「わかったー！ 心ちやんこすねーー。」

と布団にぐるまつながら、無邪気に笑つショウくん。

（いいなあ。あんなにつれしそうに笑えて。）

「どうしてお母さんとお父さんは離婚したの？」と、シヨウくんが尋ねた。

「ねえ、心ちゃんは一人暮らしなの？？」

ヒシリウくんと心は向かい合わせになつて並んで立つ。

「ハハハん。私、家族と暮らしてるよ。でも、崩壊しきみかも……。」

シヨウくんの顔がくもる。

「なんで……？」

「お母さんはね自分勝手でどこかに遊びにいって帰つてこないし、お父さんはそんなお母さんに嫌気がさして出ていった。

おねえちゃんもそれが嫌で彼氏のところから帰つてこないからかな。

「

心は、シヨウくんの顔を見ると暗い顔をしている。

「どうしたの？」

心が訊く。

「だって……そんなの家族じゃないよ。」

「やつだね。」

少し、沈黙があった。

「じゃあ、ショウくんはなんで一人暮らしなの?」

先に沈黙を破つたのが心だった。

「僕のお母さんは、違う人のお母さんだから……。」

心はすべてを察した。

「浮氣した時の子供なの?」

ショウくんはうなずいた。

「お父さんは……?」

「どうくに死んでるよ。」

とショウくんは悲しい笑顔だった。

「大変……だったね。」

心は、ショウくんを見る。

ショウくんは、布団を頭までかぶつた。

「もつ・・・寝よう。」

ショウくんの体は、ガタガタと震えていた。

心は、優しく布団のうえから抱きしめた。

このときからだつた・・・私の恋が始まつていたのは。

## 第1-2話 アキの笑顔

朝からうるさいやかな音楽が流れている。

「…………んん。」

心が先に起きた。

ショウくんの携帯からだつた。

右のほうを見るとショウくんが眠持ちよせかわいらしい寝てこら。

心は起らなことない、静かにショウくんの部屋から出た。

「「～～～おはー。」

と学校に着くとアキが抱きつこられた。

「おはよ。」

とこつもの私。

「ねえ、今日一緒に帰るわーーー。」

「わかったって。」

アキに悪いとは思つてたんだけど、なぜかいつも用事を思つて出したり一緒に帰れない。

「ねえ、アキ。あなたなんで今日は一段と子犬ビームでてんの？」

とアキがおかしいことに気がついた。

「え？？？？？？じつは・・・彼氏ができました！！」

「・・・。」

言葉が出ない。

「本当？？？？」

「じゃあ、今日みせてあげるよーーー。」

とつれしそう。

私もアキが幸せならいいと思つたし、アキが選ぶんだから普通の男の子だと思つてた。

でも、あんな男とは思わなかつた・・・。

一 帰り道一

「□□は、好きな人見つかつた？？」

「・・・。ううん。」

と下を向いたまま。

「私・・・□□はもつ傷ついてほしくないんだ。」

とアキはいつもとま、ちょっとががつ。

「……なんで？」

いつも気になっていた。アキは、こんな私のどこが好きで友達になつたんだろうつておもつてた。

「だつて、『』は私の初めての友達だもん。」

「……？」

私は、少し驚いた。

アキは、たくさん友達がいるとはかり思つてた。

「初めて……？」

私は、訊いてみた。

「うん……小学校のとき友達いなかつたから……。みんな私のこと裏切るから。」

アキが初めて見せた悲しい笑顔。

私は、なにも言わずにアキの手をにぎつた。

「……私は、一生アキの友達だから……。」

その一言だけなのにアキは、たくさん涙を流して。

私は、アキをこれからももっと相手してやれりと思った。

「そんなんじゃ、彼氏びつべつあるよ。」

アキは、笑顔でうなずいた。

町の喫茶店で待ち合わせらしい。

とノロケを聞く心。

「ねここじめくはね」

「うん」

アキ?

あの「」のアキは私のあこがれでもあつたんだよ?

なのに・・・・どうして?

第1-3話 3人で

心とアキは、あれこれ1時間も待つ。

「遅いなあ。。。」

とアキは待ちきれないのか携帯を出し、彼氏にかけるのかはわからないけど携帯にかけた。

「あつ・・・もう、私1時間もいるんだけどーーー！」

と怒ってる。でも、アキの怒り方はなんとなく可愛げがある。

「うん・・・え ？？もういいーーー！」

となんか、訳もわからぬまま携帯をきつた。

「えつ？どうしたの？」

「なんか、用事ができてこれないんだってーーー！」

アキは、テーブルにあるコーヒーをのみほした。

「もつ、行こひーーー！」

とアキは心の手をつかみ、喫茶店を後にした。

2人は、心の家に行くことになった。

「ねじやましまーす。」

とアキはが入ると、だれもいない。

「今日もみんないないから・・・。」

と心は、かばんをソファーにおいた。

「そ、う、なん、だ、・、・、・。でも、・、・、・。あの、口、は、?」

と指をさす先には、なんかベットで寝ている。

— . . . ? ?

心せき

シミズハんか心に抱く

「え！ ！ ！ ！ ？」

心はすぐ驚いた。

「誰？？心、同棲してたの？？？」

「ううん、ショウくんが勝手にはいつたんでしょ？」

と心は、ショウヘイのほうを見る。

今日は、一緒に登校したかつたもん――

ルーツのシラヘニ。ナニヤアリ。

「とかなんとか言つちやつてーー！彼氏とかーー？」

ヒトモガおやしこと幅ひしのむりうなまつれだつた。

「だからちがうつて……。」

あれから、3人でいろいろはなした。

すごい楽しかった。私の恥ずかしい話をしたりアキはたのしんでた  
ようだった。

「じゃあ、おしゃべりがいいよー！ー。」

アキは、時間になつたので帰ることにした。

「ごめんね、あんなにうるさい人で。」

「ううん。いろいろ楽しかったよ……」

• • • • •

でも、会話が続かない。

(なんか、話ないと。)

すると、ショウくんは私をまじめな顔で見てきた。

「心ちゃん・・・。」

それは、大人のショウくんだった。

## 第14話 告白

「心せひん……。」

『氣づくと私は、ソファーに押し倒されていた。

「……なに?」

「……。」

ショウくんなは、黙る。

(やばこよ……。これは、本氣だ。)

心は、確信した。

「ねえ、ショウくんな。」

心は、声をかけてみる。

すると、ショウくんなは私の上からじいた。

ショウくんなは後ろを向きながら、あぐらをかいだ。

「……。」

「え?」

心は、チラッとしか見てないけどショウくんなの顔が赤くなっていた。

「シラカベさん……。」

心は、シラカベさんの顔をみると視を込んだがまます赤くなつて、

「みるなあ……。」

シラカベさんは、手に顔をおいた。

「どうしたの?」

「……。」

シラカベさんは、何も言わない。

「……だつて、かつて懲りじやん。」

「どうが?」

心はやつぱりわからない。

「だから……好きな子に大好きって言へない」とがーー。」

シラカベさんは、また真つ赤になつた。

「……まじかつて悪い。」

(・・・え?)

心は、なんかホットあるような感じがした。

シヨウくんは、ビルもかつて懲りない。

かつて懲るは私だよ……。

いつまで好きって血分から言えないの？

シヨウくんは、年下なのに私よりも大人っぽい。  
すきだよ……。一つ一つのじぐわがすきだよ。

心は、シヨウくんのまえに座りなおすした。

「？」

シヨウくんは、驚いてる。

「せんせんかつて懲るなよ……私も返事言わなきゃね。」

「返事？」

「うさ。いやとこいつね。」

「……。」

シヨウくん……。じめん。

## 第1-5話 だいすきだよ

「ショウくん……聞ひよ?」

心は真剣なまなざしでショウくんをみた。

「……うふ。」

心は、ショウくんの手を優しく握った。

「……」

ショウくんは、すくなく顔が赤くなつた。

「私も……。」

「え……?」

「ショウ……大好きだよ。」

心は、優しく微笑んだ。

「やつた――――!」

ショウは、私に抱きついた。よっぽど嬉しかつたみたいだつた。

「ちよつー・ショウくん?」

「心ひやんが笑つた――!」

(え・・・・?)

心は、かばんの中から手鏡を出して顔を見た。

(本當だ・・・・。)

「本當だ!—シヨウくん・・・ありがとうございます。」

心はまだどんどんと涙が出てくる。

「おれ・・・心ちゃんのこと・・・大切にする—。」

シヨウくんの腕は温かくて、安らぐ私の憩いの場所だった。だつて、これほどにないぐらう優しく抱きしめるんだもん。

初めて体験する気持ちがシヨウとこじ、たくさんあった。

これからもこころのな幸せを私にひょうだいね。

—夜—

「心ちゃん・・・なんかしゃべりつけよ。」

あれから、緊張してかわらないけど言葉が見つからない。

「え？？・・・うん。」

(困ったな。。。なんにも会話が思いつかない。)

「やうだ！！

ショウは、いきなり立ち上がった。

「なに？？」

「こまからけあ合ひしてくれぬへへ。」

「うん。」

(ビ)「行くんだらう。」

ショウは、バイクを出してきた。

「乗つて！！」

「え？？・・・ショウくん、まだ15才だよね？」

「うん。でも、免許はこちおは・・・あるけど。」

心は、不安だったがショウにつかまつた。

「のま、ビ(に)に行きたいね。。。ショウ

## 第1-6話 初めての思い出

「ショウくん？？？どこ行くの？」

心は、怖いのかわからないがショウにしがみついている。

「心ちゃん！－い、痛いからもう少しだけ力ゆるくして－－。」

「あ、ごめん－－。」

心は、力をゆるべた。

「今から行くところは、俺の秘密のところ－－。」

「ええ？？教えてよ－－。」

心は、また笑顔になる。

（また笑了た。 大丈夫だよね－ショウくんといたら・・・。）

カーブを曲がると、うみが見えた。

「わあ！－海だ！－」

バイクは、そこで止まつた。

「え？？－？」

ショウは、笑顔でうなづいた。

海は驚くほど澄んでいて、月光が海面を照らしている。

2人は並んで歩いた。

「…………前見たことあるかも…………。」

心は、  
口をひらぐ。

「本當？」

「うん……でも、わからないや。」

2人は、また黙つてしまつた。

「あーーーーあつたーー！」

ショウが指さす方向には岩がある。

「座るの、何？」

「うん」

心は、ショウの隣に座った。

「ねえ、私のどこがいいの？」

心はいきなり質問をした。

(もしかして……ないとか?)

心は、がっかりした。

「あー違ひよーーなーってわけじゃないよーー」

「じゃあ、どー?」

心は、興味津々にきいた。

「……。」

なんか、言ったよつには聞いじえぬが何を言ったのかわからなーい。

「? ?」

心が首をかしげる。

「全部……。」

(え? )

ショウを見ると顔が赤くなつてるのがわかる。

「照れてる……。」

心がつぶやくと、ショウが心をみる。

「なに?」

「心ちゃん・・・大好き。」

心も顔が赤くなる。

「もう、何言つてゐのーー！」

でも、心はすごく嬉しかった。

・・・・・ わかたよ

シミも無、其物立つて見上をあた。

僕の「J」とちゃんと認めてくれるとJちゃんも、なんか、心ちゃんと  
いふと温かいんだよね。」

「そんなに・・・・？」

ううん。まだもう一つ。僕の夢……一緒にかなえてくれそう。

あの時のショウウの夜空を見上げた横顔が夢にあふれていてすこく愛おしく感じた。

心は、頭をショウの肩にのせる。

「・・・心・・・ちやん? ?

（んふ・・・・また照れてる。・・・）

「心ひやんじやなくていいよ。・・・彼女なんだから。」

心は、微笑む。

「じゃあ、なんて呼べばいいの？」

「『ハハつてみんなから呼ばれてるから・・・・ハハつて呼んでほしい。』

心は、ショウの顔を見上げた。

ショウは、心をみつめる。

「ハハ・・・・・。」

初めて『ハハ』って呼んでくれた。

「こく温かくて、くすぐったい。・・・

ずっと一緒にいようね・・・・ショウ。・・・

## 第17話 春

—春—

私は、まだみんなの前では笑つたことはないけど、いつかって思つてゐる。

あの海に行つて以来、ショウとは会えなかつた。

ショウは受験生だつたから……。

だから、少しでもいいとかも思つてたり。

「ハハ～～～！入学式始まるよーー。」

アキもなんかわからぬいけばほしゃいだる。

「なんでそんなに喜んでるの？」

「だつて、かわいい男の子が来ると喜ぶよねーー！」

（また、あきれる……。）

「どうしたの？ 彼氏は……。」

とあきれた感じで言つた。

すると、アキは少し悲しそうに言つた。

「あの時、私別れたの。」

(え? 別れた? ?)

「え? だつてラブライブじゃなかつたの? 」

「浮氣・・・されてて。」

(はあ? ? ?)

「じゃあ、あの人はアキの王子様じゃなかつたんだよ。でも、アキには王子様ちゃんと

こるよ。だから、来るまで私がアキのことを守つてあげる。。。」

(自分で言つのも恥ずかしい。。。)

「ハハ～～～。」

アキは、私に抱きついてきた。

本当にアキは私の大切な友達だから、ほつとけないんだよね。

2人は、体育館に行つた。

そこには、たくさんの1年生と偉い先生がたくさんいた。

生意気そうな子や落ち着きのある可愛い子とか。

「あ～あ。。。めんべい。」

心はあくびをする。

「 もう一 ハハ ! ! 私の王子様探してよ。 」

「 はーはー。 」

（本当に世話のかかる子だ。 ）

（うへん・・・・あの子はなんとなくカッコイイけど、チャラチャラしちゃう。 ）

でも、隣の子は頭良さすぎて逆につらわない。あーーあの子いいじちゃん。

でも、彼女持ちつて感じ・・・・。 ）

心は、自分なりに自己分析を始めた。

すると、校長先生が前に立ちなんか言つてたけどぜんぜん聞いてなかつた。

ショウウのことに思つ出ると、もつまらない。

（ ショウウ・・・・ちゃんと高校決まつたかな？心配だなあ。

とゆうか、彼女には普通高校ぐらい教えろよーーーもつーーしがもメールぐらい送つても

（ いいじちゃん。 ）

と考えがどんどん浮かんでくる。

「え～一年代表、菅野翔」

「はい。」

一人の男の子がステージに上がる。

（え？ ショウ？ なわけないか。。。）

と思い、田を下に戻すと女の子が騒ぎ出した。

「うわー あんな子が学年一位？ そつこな、みえないけど可愛い！ ！」

「なんか、モデルとかしてそつーー！」

女の子の黄色い歓声が聞こえた。

（どんなやつだよ。。。）

また、あきれてながら前をみた。

心は驚いた。

・・・・・ショウ？

え？？なんでショウガ？

心は一瞬目を疑つた。

でも、それはアキの一言で皿がさめる。

あれ・・・シミウ君だよね?」

アキも驚いている。

ショウは普段の行動を見ていて別に頭もいいわけでもなさそうだった。

どうからそんな余裕がでてくるのか不思議だった。

「へえ～ショウ君って頭めちゃくちゃ良いんだね…」

アキは私に喜んであげなよつて言つてるようだ。

•  
•  
•  
•  
○

۱۱۱۱۱۱

」・・・・・○

私は頭が真っ白になつた。

そのまま、入学式は終わった。

ショウが入学しただけならまだわかる……でも……。

今日は、入学式だけだったので毎で終わりだった。

チャイムが鳴り、みんな帰ると先生の一言でまた私の頭は真っ白になる。

「あ……そうだお前ら……。」

みんな、先生に注目する。

「今日、1年の菅野翔があいさつしただり?あいつ、今年の生徒会長だからな……!」

だからみんな翔になんか提案したいことがあつたら言えよ……。

また、女子の黄色い声が聞こえる。

「私、わざわざ行ってみよ……。」

「わたしも行く……。」

いつせいに行つてしまつた。

「ハハハ…どうする?」のままだと高校生活、ショウくじと過ごせなくなるよ……。」

「…………える。」

「え？？」

「アキ…………もひ帰るつーーー。」

「え？？」

私は、アキの手を握りそそくさに帰った。

私は怒つてたのか、さみしかつたのかわからなかつた。

それとも・・・嬉しかつた？

でも、言えるのは。。。

私はすいぐ・・・やめもうひをやいていた。

## 第19話 嘘

「ねえ……」「？」

アキは、私についてくる。

「……」

「もう……」「」

アキは、心の腕をつかんだ。

「……」

「聞いてる?」「

アキは息が荒い。

「あ、『』めん。ぜんぜん聞いてなかつた。」

「どうしたの? ?」「」「変だよ?」

アキの目がまた子犬ビームに変わった。

「……別に。」

心はアキの目からそらした。

「ショウ君に今から逢つて来なよ……」

「え？」

「 ハハ・・・エハッて? つて顔してるよーー。」

アキの真剣さが伝わってきた。

「 いいんだよ。シコウ、忙しいから。」

「 だめーーー。」

アキの大声に心はず<sup>ゾク</sup>く驚く。

「 ハハは自分の気持ち言わなかつたからあんなことになつたんだよ  
??. もひ、逃げないで

ショウ君にまつすぐに走つていきなよーー。エハッジやないと、いつ  
までも私心配だよ。 。 。 」

アキが心の制服をつかむ。

(かわいい・・・アキ。)

「 わかつた。 言つてくるよ。 。 。 」

このとちも、私はアキに嘘をついてしまつた。

じつは、あのあとショウ君になんか逢つてない。

「 めぐね・・・ 酒氣が出なくて。 。 。 」

だって、彼女なら教えてもいいでしょ？

でも、あのあと以来電話1本もメールの1通もなかった。

私はすぐ心配してた。

じつは、私のかんちがいかもしれない。

そう・・・・思つたから。

だって、あのあとショウに逢いにいつたけど・・・・・。

ショウは、私にも見せない顔を女の子に見せていた。

すいじく楽しそうだった。

すいじく仲良くて、入りこめない不陰気だった。

私は・・・・甘えられなくもなつていたらじい。

## 第20話 休日のある日

私は、やつと気づいた。

私は人に甘えられないんだ。。。。

少し・・・ショックだった。笑えられるようになったのはうれしいけど、また大きな壁が出来た。

今日は、入学式が終わって久々の連休。

私は、ベットで「ゴロゴロ。

「ゴロゴロゴロゴロ」

携帯が鳴る。

ショウウじゃないことは確かだった。

ショウウは、生徒会長とこつ役で連休もないって先生が言っていた。

「はー。心です。」

「あーー。ココがやんだあーー。」

ショウウの声。

(え??.今日は仕事あるんじゃないっけ?)

そのとおり、私は悟った。

先生は、ショウの人気つぱりをみてみんなに嘘をついたんだ。ショウの仕事の邪魔に

ならなによつて。。それで、先生も私がショウのおつかげだと思つて。。。

「今日せどりしたの?」

心は、少し明るご顔で話した。

「いや、ちよつとわ。。。。」口の中の声が聞きたいなあ。。。。つて思つて。」

心は顔が赤くなつたのも自分でわかるくらい照れていた。

(ショウの「まかーーうれしこ」とばつからずつとい。。。。)

「 もへ、 れふう仕事ないの?」

「 へへ。 これから仕事です。」

と残念そつたショウの顔が浮かんだ。

そつ思つと、なんだか可愛く。

「 ねえ、 こまから会ねつよーー。俺、 心うやんに逢いたい。」

と寂しそうに叫ぶ。

「わかった……。」

心は、急いで玄関をでた。

「わふと……。

「おはよ。二二十九ちゃん。」

笑顔で待っていたのはショウだった。

「えへっすいと、ここにきて話していたの?」

「うふ。わうだよ。会ったじやん。今すぐ逢いたいって……。」

心は、ショウを抱きしめた。

「あっがとふ。」

「二・二九十九さん?」

ショウはこれには驚いた。

「家……入る?」

「うふ。」

ショウの二二九の嬉しさことが私の満たされない心を満たしてくれる。

さすがだね。  
。。  
ショウ。

## 第21話 休日のある日②

「へえ、口口ちゃんの部屋ってなんか思つてたのと違つたな。」

「どんな感じだと思つたの？」

と心はカップを口から離した。

「うーん・・・なんかアダルトな感じ??」

「ちがいます!!私は、そんなに大人じゃないもん。」

とムツとした。

「嘘、口口ちゃんの部屋はいつも感じだなあって予想ついてたよ  
！」

「なんか・・・それって怖い。。。」

と引いた感じで呟つと、

「なんだとーー。」

ヒシリウが後ろから抱きついてくる。

「もうーーーシリウつてばーー。」

私は、また笑う。

す"J"く、楽しい時間。今まででは、考えられなかつた。

心は、ショウのほうを見た。

ショウは、じつを覗つめる。

（なに？また、ショウが私をバカにしようとしてんな！－）

「ハハハハん・・・・田闇じて。」

セリでわかつた。シ田ウは私にキスしようとしてるんだ。

(え? でも、どうしたらいいの? 私、初めてだし……)

でも、シミツにならう。――

心は、  
口を開いたんだんと近くなっていぐ

ヒンホーン ヒンホーン

( もう!! もう!! たのには!! )

心は、残念な気持ちで玄関に行くとお姉ちゃんのまきちゃんだつた。

「私……………しばりへりじてゐる。」

とこつて、入つてきた。

「のとわせ、ぜんせんぬづかなかつた。

わわわやんせ、どんなことがあつて戻つてきたのか。

わからなかつた。。。

## 第22話 休日のあぬ日

真紀ちゃんが1週間ぶりに帰ってきた。

真紀ちゃんは、彼氏のところで暮りと書いて家を出た。

それ以来からぜんぜん連絡がなかつた。

「真紀・・・ちゃん?」

心配そうに真紀を見つめる。

「ん? 私は、大丈夫だよ。。。ちよつと、□□に会いたかったから。  
。。」

少し暗い真紀ちゃん。

(ぜつたいなんかあつたー!)

でも私は、それからはなぜか聞き出せなかつた。

あんなに元気でお姉さまって感じだったのに今は、ぜんぜん元気がない。

「お姉ちゃん・・・はい。」

心は、□□を差し出すと笑顔で□□を飲んだ。

「ありがと。」

今まで、あまり笑顔とか「ありがと」など普段は口にしない真紀ちゃんが今日は違う。

笑顔がなんかゆるけていいんだけど……なんか悲しい笑顔。

(ん？？なんか忘れてるよ？な……。)

心は思は出した。

「……シコウ？」

恐る恐る、聞いてみた。

「ん？？なに。」

少し怒り気味……

シコウは、体育すわりをしながらほっぺを膨らます。

「じつせ、おれなんじやうつ対象だからな。」

(あ……わかった……やめやめ……かな?)

「やめやめ……」

と心はシコウの顔をのぞき見る。

「ち、ちびーよ……バカ……俺がやめやめ……や、やくわけないだろ？？？」

とあせつてる。

(かわいい。。。)

このときは、なんでそんなことしたのか私は予想してなかつたけど・  
・・。

たぶん、ショウが愛しかつたからだ。

心は、ショウのホッペにキスをした。

「やうやう所も・・・大好きだよ。」

「！・・・・・バカ。」

ショウは照れていて、あまり顔を見せてくれなかつたけどすゞしく愛  
しかつたのは

覚えている・・・。

## 第23話 アキへの笑顔

今日も学校は一人で行つた。

ショウを誘つてみたけど、みんなが見ると恥ずかしいし、女子に絡まれるのは嫌だとか言って

今日も先に行っちゃたらしい。

（じりせ、シミウはみんなに冷やかされるのが嫌か、私といふとやじこじが起つるから

嫌なだけじゃん・・・・。(

少し怒り気味で歩いていると、アキが来た。

でも、アキがいるとなぜかその怒りは消えていた。

「どうしたの？いいことでもあった？」

「うん！」

アキは私の腕をつかみ、二尺二尺している。

「何？教えてよ。」

「え？？？忘れたの？」。昨日、メール送つてくれたじやん！

！」

「え？ それだけで喜んでんの？」

心は、唖然としていた。

「だつて、前も「」がメールあげるつて言つてくれなかつたじゃん。」

（あ・・・・そういえば、あの時は変な人に襲われてメールビーム  
じやなかつたもんな。）

と昔の思い出にひたつていた。

（あれ？ そういえば、昨日送つたのつて、おやすみ、ぐらいしかお  
くつてないよ。）

アキは私に一言のメールをまわしつつだけでこんなに喜んでくれた。

かけがのない親友。

心は、アキの手を握つた。

「？」

「私達は、ずっと友達だよ。」

恥ずかしかつたけどアキに言えた。

アキは、涙をながしながらうなずいた。

こんなに可愛くて、純粹で私のことを親友として想つてくれてるアキが私は嬉しかった。

学校に着くと、こきなり田たつたのはショウヒ・・・たくさんの女子の子。

「何あれ！一菅野くんあんなに女子に囲まれて。」

アキが指をさす。

「アキ・・・指をさすのはやめなさい。」

と心が落ち着いた口調で話す。

「いいの？あんな一緒にいてくれない彼氏を他の女子が一緒つてのは・・・。」

「やうだけど、ここは我慢しなきや。や。」

「うん！…それまで、私が！」

心はアキに顔を向け、微笑んだ。

「・・・アキ、ありがとう。」

「・・・・・。」

アキはあまりのことで驚いている。

「？アキどうしたの？」

「笑つた……。」

アキがつぶやいた。

「え？」

「口口が笑つた！！」

アキは心に抱きつく。

「え？」

心もあまりのこと理解ができなかつた。

でも、すぐにわかつたのは私……やつとアキのまえでも笑える  
よくなつたんだ。

## 第24話 ショウの気持ち

アキとはますます仲が良くなってきたけど、ショウとはあまり仲は良くなくなってきた。

最近まで、メールをしてたがめんべくなくて、心はせんぜん送り通がつた。

私のこと、せんぜん大切になんかおもってないじやん。

やつ思ひよつこまでなつてしまつた。

逆にアキのメールを返すとすぐ戻り返りてくるから、毎回送つてゐる。

「あ・・・・・ショウからだ。」

心は、携帯を閉じる。

(なんで、私が怒つてんのわかんないかな?)

昨日、私が廊下でショウが前、遊びにきたとき時計を忘れていた。

それをわざわざ、となりの校舎までわたしていったの・・・。

「え・・・・・わざわざわざこきたの?..」

ショウは、平然としている。

でも、私が気になったのは周りでショウの同級生の女の子の痛い目

線だった。

「うん。」

心は、早く教室に帰りたかった。

でも、それはショウの「で私は、ショウの気持ちを疑つてしまつた。

「別に・・・持つてこなくていいのに。俺、忙しいから・・・。」

私は、放課後アキにそのことを話した。

「ええ～～？？？ふざけるなあ！－－菅野くん、何考えてんの？？」

アキは私と一緒に怒つてくれた。

「そう・・・思つ？」

「え？」

アキが私を見て驚いてた。

だつて、私が泣いていたから。

初めてアキの前で泣いちゃつた。

あのあと、ショウからメールがきたけど無視し続けた。

心は、あともう少しで夏休みだとこうして氣がついた。

(「どうしようかな。。。夏休み、今年はひとりじゃん。」)

毎年、夏休みを一人で過ごした時間は1分もなかつた。

男と海外旅行をしたり、どこかでかけたり。

でも、キスとかその・・・まあHとかは1回もしたことがなかつた。

私が拒んだんじゃない。男がしないだけ・・・。

遊ぶだけの女だったから。ちゃんと男には、本命の彼女がいて彼女と遊べない日は私を

呼び出す。そうゆうシステムだった。

でも、最近・・・電話番号を変えてそうゆう電話をしなくした。

全部・・・ショウのためなのに。

心は、なんか昔のことを思い出したくないのでそのまま寝てしまつた。

そのころアキは、ショウと会つていた。

「ねえ、菅野くん。心となんかあつた?」

「え?別に・・・。」

「心・・・泣いてたよ。」

## 第25話 ショウの気持ち2

「・・・ええ？？？」

ショウは「」との重大さにわかった。

「どうして、あんなこと言ったの？」

アキが真剣にきく。

「はあ？？だつて・・・」

「言い訳しないの！――！」

アキが机をたたく。

「いや、待つて！――だつて、おれ昨日、風邪でずっと家にいたんだ  
けど。」

「・・・え？」

すると、ショウの部屋のドアが開いた。

「ただいま！――あ。ごめん、お取り込み中だつたね！――！」

その人は、ショウに少し似ていて大人っぽい人だった。

「もしかして・・・兄貴！――お前、変装して俺の学校に行って、心  
と会つただろうう――！」

「はあ？おれ、知らないし。」

「じゃあ、だれだらう。」

アキは、ショウの凶む顔をみて、少し安心した。

「ねえ、菅野くん。ハハの」と不安にせりやダメだよ。」

「？」

「だつて、ハハがずっと菅野くんのこと好きでいられる自信なんてないでしょ？それに菅野君

と別れようかなって言つたよ（うひ）」

「ええ……」

アキは、ショウにやつて帰つて帰つて帰つて帰つて帰つて帰つて

シロウはベットに寝たべつて、考えていた。

（やうじえば、最近、心と遊んだり、しゃべてないし。しかも、メールの返事もくれなくなつ

たし。。。本当にハハに嫌われっちゃたかなあ。）

すると携帯がなつた。

ショウは、心のことを想いながら手を開じた。

「・・・・はい。もしもし。○○」

ショウは心のことで悩んでいて元気がない。

「もしもし。」

ショウはガバつと起きた。

「アーニャさん? ? ? ? ?」

「うん。最近、メール無視してて」めんね。。。だって、ショウが  
あんなこと言つなんて

思わなかつたんだもん。 。 。

心は泣き出しちゃった。

(そんな冗ひじけ)をいたのか??その「セシムかほ!-!」

「おのれも、そのじとなんだけど……。」

ショウは、全部話した。

「だから、あれは俺なわけがないんだよ。」

「本当？信じるよ？」

「うん。 。。 信じて？」

心の“信じるよ”と一つ一言で俺は、顔が赤くなってきた。  
心を愛しいと感じた。

## 第26話 ショウの気持ち

“ パパパパパパ ”

田原ましがまだ、眠そうな心を起します。

心は、ぐらぐらな髪をとかしてアイロンでまつすぐました。

朝食もあまり食べないで制服の準備をした。

心は、昨日から気になっていたことがあった。

真紀ちゃんのこと。

心が、真紀ちゃんの部屋をひっかり開けると真紀はベットでぐつたりしていた。

「・・・真紀ちゃん。」

心は心配でしうがなかつた。心は、シスコンツボモニといもあせりにすじ心配して

いた。

真紀は心の4歳年上で21歳だった。恋より仕事が大事だった真紀の仕事はエステシャンの

社長だった。

でも、そんな真紀ちゃんがあれだけ母や父を嫌つてこの家を出て行つたのになんて戻つて

きたのかがわからない。

聞きたいけど、聞いてやつけないような気がした。

「真紀ちゃん、行つてくるね。」

と小声で言つてから玄関を開けると、それにまことに心の大好きなショウがいた。

「・・・おはよう。ママちゃんー。」

ショウの笑顔は輝いていた。

「待つてたの??」

「うん。だって、昨日アキちゃんに登校、なんと一緒にいてやらないの??って言われて

俺言つた覚えがなくて。。。俺、そんなもつたいない事しないよ

?一セシショウはひじ

「と言つたかもしないけど、俺は言わない。一緒に行こう。」

と手を差し伸べてくれた。

「・・・うん。」

心はつなぎいた。

「ねえ、誰だと思つ?..?」

ヒョウがいきなり唐突にきこひきた。

「え?」

「だから、ニセシヨウ。俺に相当、似ていないと心が間違つはずな  
いし・・・。」

「うそ、やうだよね。声もすうこねつくりだつたあ。」

「そいつ見つけたらこいつぱこじりしめなわやなあ。」

ショウは笑顔で言つ。

「なんで?」

心は首をかしげる。

「だつて、俺の口を泣かせるよつなことこつたんだひへへ..?」

ショウは、心の頭に手をポンと置いた。

心は、ショウの気持ちを信じた。

## 第27話 ちょっとした不安

—生徒会室—

「ねエ、いいの?」・・・生徒会室だよ?」

心は恐る恐る入る。

「大丈夫だよ!…だつて今の時間、俺達しかいないから。」

ショウはそう言つて、書類をあさつていた。

(え? てことは・・・2人きつり? ?)

心はちよつと期待していた。

でも、ショウはなかなか近づいてこない。

「どうした? 俺の顔になんか・・・ついてる?」

ショウはボケつとした心を見て、ちよつと笑つ。

「え? う、うう。『めん・・・ぼうつしてた。』

心は、顔が赤くなる。

「ふうーん。」

と言つて、また書類に目を落とした。

(だつて・・・ショウがめがねかけてるの見たの初めてだつたし。 )

心は、少しため息をついた。

「「」ねん。 ハハ、 つまんなこよね。 」

ショウは、心のため息がきこえたのか、心配してきた。

「いや！ ！ そりこり訳じやないよ！ ！ 」

と心は我にかえつた。

「今日はいいや。 もう帰ろいへ。 」

と少し微笑んで、心の手をつないだ。

「・・・うん。 」

心は、恥ずかしかった。

なんでこんなにショウは私より大人なの？

私・・・情けない。 。 。 普通は、年上の女なら気をつかわなきやいけないのに・・・。

びついたり・・・。

「ねえ。 」

心は下を向きながらボソッと言った。

「ん? 何?」

ショウは、笑顔だ。

「あの・・・さあ。」

心は言つ寸前でショウが止まつた。

心は、前を見ると恋人が口キスをしていた。

「・・・あ。」

心は、顔があかくなる。

(初めてだしや。こんなまじかで人のキス見るの。)

「・・・行こう。」

ショウがつないでいた手を離した。

「一。」

「ああやうのうて困るんだよね。特に学校だと。」

ショウがあきれた顔をしている。

(あの」と言わなくて良かつた。“キスして”なんて言つてたらあ

あらわれてかも。）

心は、少し安心した。

「シラウマ……ああやつの勘手なの？」

と聞くてみた。

「……へーん。まあ、勘手……なのかな。」

「あ、そうなんだ。」

心は少しがつかりした。

帰り道はなぜか会話が見つからなかつた。

ひよこのシラウマをやつてこけるか心配になつてゐた。

「ただいま。」

心は元氣がなかつた。

「あ、おかえりイーー。」

「・・・・・。」

(・・・え? なんていんの? ?)

「どうしたの? ?ナギちゃんはふれしへて言葉、失つたりやつた  
? ?」

その人は、どう見ても20代の女人で、髪はくびらこの髪の長さ。

身長は高く、とても綺麗な人。でも、私が一番嫌いな人。

「なんだ、お母さんがいんの? ?」

すると、その人は心のホッペをグードなぐつた。

「、お母さん、呼ぶなつてんだろ? ?そんな年じやねんだよ  
? ?」

いきなり性格や口調が変わつた。

「・・・『メン。ナギちゃん。』

「わかれればいいんだよ。」

「わづ、お姉さま気分の」この人は心のお母さんだつた。

「あーーーそうだあ。」「ちやんーーー真紀ちやん、」この家に帰つてきるんでしょう？」

とまた、かわいいママに戻つた。

「うふ。もうだけど。。。。」

（なんで。。。。知つてるの？？）

「でも、真紀ちやんはいまさら私なんかに会いたくないか！！」

と笑つてゐる。

実は、姉が家を出る2日前、大変なことがあつた。

あれは、思ひ出しへはなかつた。

とても、悲惨だつた。そのせいでお父さんもいなくなつてしまつた  
し。。。。

あれは、まだ姉が学校から帰つてきてなかつたとき。

「ただいまー。」

と真紀ちやんは、普通どつりに帰つてきた。

（あれ？お母さん帰つてきてる。めずらしい。いつもは、朝帰りなのに。）

すると、部屋で声がした。

（あーあ。またか・・・。お父さんがいなくなつてからいろんな人、家につれてくるからなあ。

困るんだよね。。。まだ、純情な心だつているのに。。。

そのとおり、真紀ちゃんはちょっとした興味で耳をそばたてた。

「・・・あ・・・ダメだつてばあ。もつ。」  
お母さんは、笑つていのようだつた。

真紀は、そつと扉を開けると裸の男とお母さん。

(うわあ～！！)

真紀は、顔が一気に赤くなつた。

「すげエーきれいですねー!…さすが、真紀の」

と語りとじるをお母さんは、人差し指を口に当てる。

「嘘ついたやだのよ。。。真紀ひせんに知りたがわいへ。あの子、かうへぬいのかいへーーー。」

「わかった。。。ねえ、まだ、」セイでしゃつてこたい。

「こーこわよ。。。真紀ちゃん、今日はアマルバイトでおそいかが。」

「ああ、今日で真紀ちゃんの彼氏と廻っていた。

それは、真紀ちゃんの心に傷がついた。

## 第29話 ナギひゅやんの過去

ナギひゅやんとは、コビングにこもなにも話題になかった。

もへ、時計の針は6時をさしてこな。

” ひんぱんぱん ”

と携帯がなつた。

(ハラキーヤー…)

重苦しいふいんをから抜け出せると嘆いた心は、コビングから離れようとした時、ナギひゅやんが

やつと口を開いた。

「ここよ、いいで話しても。」

ナギひゅやんは、タバコを吸つた。

「あ、あつがとつ。」

心は、携帯にてた。

「はこ、心ですか…。」

するとい、元気な声がした。

「ココー？？？？今、何してた？」

(ショウだ・・・。)

「えへつと・・・今、お母さんがなくて、ながれやんといふよ。」

「え? なあちやんってだれ? ?」

うーん、お姉ちがいなんどうか、なんどうか……」

え――!!俺見だし――!!

シミツノ御用事たゞたゞ

文庫本と待て

”  
—  
—  
”

携帯がきた。

（本当に・・・来たりしてね。）

ため息をつくと九ちゃんが話しかけてきた。

「何？彼氏？」

「え？？まあ、うん。」

心せサシテシハニル。

「やつぱつね。」

ナギちゃんが少し微笑んだ。

「なんでわかるの？」

心はきいてみた。

「だつて、男に悩んでる顔だつた。なんてゆつか、幸せなんだけどそれだけじゃ足りないみたいになね。」

（すゞい・・・あたつてる。）

「ナギちゃんも・・・そつねつ」と・・・あつた？」

ナギちゃんは、少し驚いていたけれどなんか表情がゆるかつた。

「うん、あつたよ。タイチくんかな？」

”タイチくん”とは、私たちのお父さんのこと。

タイチくんは、私が生まれる前からいなかつたらしい。

だから、ナギちゃんは私達をここまで育ててくれたんだ。

「タイチくんてどんな人だつた？」

「ん・・・？すゞいにカツコイイよ。やさしいし。でも、残念なこと

はココちゃんの顔をあの人は

一度も見た」とがなことだな。」

(それは、初耳だった。)

「なんで……知らないの？」

と慎重に聞いてみた。

「だって……仕事でこんなとこに行つてたし、私達は恋に落ちはだめだつたから。」

「……。」

「どうつかね、真紀ちゃんもこね」とも黙つてた。」

ナギちゃんは悲しそうな顔をしていた。

「なんで……？」

「『ナギちゃんは、こんなこと聞きたがるね。だって……タイチとは、義兄弟だつたから。』

お母さんやお父さんに知られたり……やばかったから。」

ナギちゃんは、本当に何か物足りなさがあった。

「んなナギちゃん……初めてだつた。」

### 第30話 ナギちゃんの過去2

「よく黙つてられたね。」

心は、悲しそうな顔をした。

「やう? まあ、私にはなんとも無かつたけどね。」

と笑顔のナギちゃんを見て、心はすげになあと思った。

「私……その話……聞きたい。」

「え……。」

ナギちゃんは、悲しそうな顔で私をみた。

すると、チャイムが鳴つた。

「ちょっと、行つてくる。」

心は、玄関を開けると真紀がいた。

「ただいまーー!」

真紀は、少し「機嫌で帰つてきた。

「あのね……いま、ナギちゃん帰つてきてるの。」

心は、やつとの戻りで真紀に言った。

「はあ？？？あいつ、 いんの？？」

真紀は、舌打ちをした。

「ねえ、今ならナギちゃんの話、聞けるかもよ？」

心は、部屋に入ろうとしている真紀に叫びた。

「・・・」

「知りたかったんでしょう？？いろいろ聞きたかったんでしょう？？？」

心は、声を張り上げた。

「うわわこなあ・・・」口は、あちち行つてよーーー！」

ドアを閉めようとしたとき、いきなりドアから手が伸びてきた。

「ーーー」

真紀は驚いた。

「真紀も聞いて。今なら全部・・・話せる。」

それは、ナギちゃんだった。

「なんで今なのよー！私・・・疲れてるからーー！」

真紀は、ドアを閉めようとしたが、ナギちゃんの力で閉まらない。

すると、ナギちゃんは土下座した。

「『めん！』真紀ちゃんの好きな人、奪つて『めん！』本当に『めん

一生懸命に謝った。

「アーティストの世界」

真紀はたじたじになつてゐる。

「今だから・・・お願い!」

ナギちゃんが泣いたところ・・・初めて見た。

### 第31話 ナギ物語

私は・・・強くなんかない。

ただ、強くならなければならぬんだ。。。2つの宝物を守るために。

「ナギイーーー！」

と1人の男の子が走つてくる。

その子の名前は”タイチ”私のお兄ちゃん。

「何？」

「今日は、学校休みだから遊ぼう??」

「はいーーー！」

私はあのころは、まだ小5だつたし、社長令嬢だつたから遊ぶのにもだれか1人ついていなければならぬほどだった。本当にまらない生活だった。

でも、タイチくんとはなによりも楽しい時間だった。

「ナギは、小学校楽しいか？」

「ううん。せんせん。」

「そうか。」

そう言って、そんな時は、タイチくんが私の頭をなでてくれた。  
でもまだそのときは、別に兄弟として好きだった。

私が・・・14歳になるとまた

「ねえ、兄貴？」

私は、タイチくんと呼ぶのはやめた。

だって、『ブラン』って言われるのは嫌だつたし少し反抗期だつたから。

「ん? 何?」

つて笑顔のタイチくんは好きだけど・・・そんな恋は実らないことくらいわかっていた。

だから、あつたていた。

「今日も彼女つくれくんの??」

「うん・・・ダメだつた?」

いつも、ホンワリタイプのタイチくんは純情そのもだつた。

「別に・・・でも、いつも勉強の邪魔だから。」

とこうひんだ。

「「めん。」

そういうと、また笑顔を見せる。

（じうせ、私のこと子供だつて思つてゐるくせに・・・。）

”ピンポーン”

ヒチャイムが鳴る。

（彼女だ・・・。）

そう確信すると、私はいつも部屋にこもる。

でも、今日に限つてタイチくんの部屋に忘れ物をした。

（めんべくや）

そつ思つて、こつやけり部屋を開ける。

すると、ナギの田に衝撃が走つた。

「タイチイ・・・。早くきて。」

とタイチの彼女がタイチ君のベットで裸になつていた。

（え・・・。）

「「「あん……俺には……無理だよ。」

タイチくんが泣いていた。

「早く……もうじれったいなあ。」

とこきなつタイチくんの胸元をつかみ、キスした。

「もう……やめり……。」

すみど、ナギはタイチと皿が合つた。

「な……。」

私は、もうそのとき、迷いはなかつた。

「うふと、何やつひんの???.」

ナギは、ドラマを思つてきつ開けた。

「うふと……何いきなり開けてんの?」

彼女は、すじこじりんできた。

「わわんないで……」

「はあへへへへひびーーーもひ、帰るーーー。」

と彼女は着替えていそいそと帰つた。

タイチは、ソーシャツをちゃんと着替えた。

タイチとナギは、ロビングでソファーに座った。

「なんで、嫌がつてんのに無理にやがるのかあ？？本当にひどい！

ナギは、怒つてこるとタイチは笑つた。

「何？」

ナギは恥ずかしくなつた。

「だつて・・・俺、嫌われたのかと思つたあー最近、俺とこるとす  
『ニハザルハシナムジヤン？』

す、」に心配したんだよ？？」

「ナニ？？」

「やつぱつと、嫌じやん？同じ年なのになむ兄ちゃんつじ。

なんぞそんなに愛おしい田で私のことあるの？

やめてよ・・・。気持ちがあふれるじやん。。。

私は気づいたり・・・。タイチくんと寝た。

イケナイ」とつてわかつておきながら。。。

## 第32話 ナギ物語—妊娠—

あれからタイチくんと恋しくなってきた。

それは、幸せだけど親に対する罪悪感もあった。。。

「・・・ナギちゃん? 起きてる?」

愛おしい声が私を呼ぶ。

「うん。。。。何?」

「これからも・・・俺の」と恋してくれるよね?」

タイチくんは照れてるのがわかった。

「うん・・・じゃあ、私も恋してね。」

「当たり前じやん。」

「だから・・・私以外の人に・・・やつひや嫌だよ?」

困ると思つたけど、タイチくんはためらわず、私を抱くしめてくれた。

私は、そのまま続けばいいと思つた。

でも・・・続かなかつた。。。

あの後、私は親に呼ばれた。

「お母さん・・・あんたに言いたい」と・・・あるの。」

「なに?」

私は、真剣には聞いてなかつた。

「タイチとナギは・・・本当に兄弟じゃないの。」

「・・・。」

(え・・・?)

私は、持つていたお菓子を落としてしまつた。

「うのうと・・・タイチくん・・・知つてゐ?」

「いじえ・・・。タイチは・・・一番傷つくなつて・・・。」

「え? どうゆう意味? おかあさん?」

お母さんは、涙をためて謝つた。

「タイチは・・・私の子じゃないの・・・お父さんの愛人の子なの・・・。黙つて」めんなさい

本当にめんなさい。・・・タイチ。・・・」

私は、たとつた。・・・

私達は、愛し合つてはいけないんだ。

じゃなあや・・・お母さんが可愛そう。。。

ごめん。。。タイチくん。。。

私は、家を出た。まだ、14なのにな・・・だつて、タイチくんといたら愛し合つてしまつよう

な気がした。

でもそれは・・・自分を苦しめていただけかもしない。

1人で暮らすようになつてから1ヶ月たつて、体調がいきなり悪くなつた。

病院に行くと、結果が出された。。。"妊娠"

頭が真っ白になつた。タイチくんと離れたくて、離れたのに別の形でタイチくんのそばに

いることになつた。

14といつ若さで私は、子供をさずかるんだからそれなりには決心が必要だつた。

最初は、中絶しようと思つた。

でも・・・出来なかつた。

お母さんにも相談できないし、タイチくんになんかもつてのほかだつた。

そのつらさが、お腹が大きくなるにつれて世間の人の目は厳しくなる。

1回、自殺も考えた。

そのとき、ふとタイチくんの笑顔が見えた。

”もつとがんばって” そう聞こえた。

その日から私に力を貸してくれる人が現れた。

彼女はわたしより10才も上で小さいころからの幼馴染。

私の唯一の親友でもあった。

名前は、”なつき” だった。

私がつらいとき、いつも一緒にいてくれた。

なつきは、産婦人科の医者でもあったし勇気強かつた。

なつきのおかげで、私はかわいい女の子が産まれた。

名前は”真紀”とゆう名前にした。

そのとき・・・決めた。

この子は、だれにもわたさない・・・。

### 第33話 ナギ物語ー再会ー

そのあとから、私はアルバイトをした。

そのとき、真紀ちゃんはいつも私の後ろにいる。

でもそのおかげでいつも頑張れた。

「真紀ちゃんーー眠いでしゅか?」

私は、赤ちゃん言葉で真紀ちゃんにはなしかけるのが好きだった。

「う・・・だあー!」

真紀は、いつも返事を返してくれた。

2人で幸せだった。

でも、やつぱりタイチくんのことが忘れられない。。。

気持ちを押し殺して我慢していた。

夜になると、涙で部屋が湿るぐらい泣いた。

「い」めんね・・・タイチくん。」

いつも泣いていた。

そのとき、ふと想つた。この子が3歳になつてから一回だけ会つて、

それで忘れよ'。

そう思つた。

そんなことを思つてゐると、時は早かつた。

「……の? 本当に後悔しない?」

なつきは、私を心配してくれた。

私はどうとづ、タイチくんと会つことにした。

「大丈夫! — 真紀ちん、お願ひね!」

笑顔で手をふつて、タイチくんのもとへ向かつた。

タイチくんは、まだ家にいるそつだ。

でも、お母さんはお父さんと旅行中らしい。だからこの日にした。

この田舎もすこし懐かしい。

すん」「小ちこちのは、お嬢様つていわれたのに今は3児の母。

私はタイチくんに会う前にお気に入りのところへ行つた。

そこは、夏にだけしか見れないヒマワリ畑。

ここは、私とタイチくんとの大切な思い出。

「はあー！！ いい気分！！」

こんな気分になつたのはお久しぶりだつた。

私は、時計を見た。

（もう・・・11時かあ。）

でも、こんなに天気がいい日はなかつた。

・・・行くか。

私は、立ち上ると後ろで声がした。

「…………ナガヒヤン?」

11

後ろを振り返ると、あのタイチくんがいた。

「・・・・・タイチ・・くん。」

私は、”タイチくん”と言う前にタイチくんは、私を抱きしめた。

あのぬくもりがまたよみがえる。

「うんね・・・せんとウル・・・」うん。

私は、何度も謝った。

「お願いだから黙つて……」

すると、タイチくんは私にキスをした。

ほら、いつかせつめて流されたんでしょ？ また泣きたくなるでしょう？

でも、言葉だけではこの思いをタイチくんに届けられないと思つた。

だから……私達はまた愛し合つた。

いけないってわかつても。。。

今度は、もつと傷ついてわかつても。。。

「……ねエ、ナギちゃん？」

「ん？ 何？」

「もつ……お願いだから黙つて……行くなよ。」

タイチくんは、私の背中で泣いていた。

「泣かないでよ。。」泣いただって泣きたくなるでしょ？」

私も大粒の涙を流した。

このまま……タイチくんといたい。。。

でも、私には大切なものがいる。だから、帰らなきゃいけないんだ。

タイチくんは、するいよ。。私もまだ友達と遊びたいよ、まだ学校行きたい。

こんな苦労は、私には重過ぎるよ。

なんて・・・残酷なの?今、好きな人とじりじりしていられるのに時間が限られてるなんて。。。

もう・・・会えないなんて。なんでこんなつらいのをまだ18にもならない私が背負わなきゃ

なんないの?

でも・・・またいつか会えるよ。

「・・・タイ・・・チ?」めんね。もう、いかなきや。」

私は、すごい頑張ったと思つた。

帰り道も涙でいつぱいだった。

もう、全力で走った。

なにもかもなくしたい気分だった。

このことは、心に閉まつてしまつ思つた。

「ただいま。」

「・・・おかげり。」

玄関で待つてくれていたのは、なつきだった。

「うわあ～ん！～！」

私は、真紀よりも大きな声で泣いた。

「・・・よく・・・頑張ったね。」

私をほめてくれた。

・・・これで終わつたかと思った。

でも・・・まだ始まつたばかりだった。

## 第3・4話 ナギ物語—真実—

「おめでとうござります。妊娠しています。」

また・・・あのときの繰り返しだ。

あの時、タイチと愛し合った結果がまた出てしまった。

でも、あの時よつはだいぶ楽だった。

真紀のときと同じように頑張ればいいんだあ。。。

そう思つと楽だった。

なんとか2人目も元気に産めた。

少し自分をほめたくなつた。

まだ、19になるのに4歳の子と新生児を育てるんだから。

「真紀ちゃん?..おいで!..」

「はあーーーーーわあ、かわいい!..」

生まれたばかりの赤ちゃんを見て、喜んでいる。

「お前は?..」

「うーん・・・・・」

あるとふと思いついた。あの時に出来た子だから……”心”

「心ひやん……」

「心ひやん？かわいい名前……」

「どうしよう？真紀ちゃんもお姉ちゃんだから頑張ってね！」

「うん。」

あのときは、まだ親子関係は安心していた。

でも・・・私はその一つの宝物を捨ててしまった。

あれは、私が28のときだつた。

真紀に年上の彼氏が出来たりじい。

「それがね！－すん－」－クールで－－！」

「へへ～よかつたじやん。」

私は、別にそいつしか思わなかつた。

真紀が幸せならば・・・。

そつ思つた。

でもそれは、あの日以来で変わつてしまつた。

”ピンポン”

とチャイムがなる。

「はあーー。」

と玄関を開けると、1人の16ぐらいの男の子が立っていた。

「あの・・・」

私は、誰かを聞いてみた。

「あ、ぼくは真紀さんとお付き合なつけてもらつてゐる橘です。たちばな」

「ああ！…真紀の彼氏……じゃあ、どういへ。」

と橘くんをあげてしまつた。

2人でリビングで話した。

「あの・・・失礼ですが、今おいくつなんですか？」

と橘くんが話しかけてきた。

「え・・・28なんですか？？若いですね。」

と橘くんは笑顔で答えていた。

「なんか・・・欲しくなっちゃつた。」

橋くんがこきなり、私の首元に唇をすべらせた。

「やーーーやめてーーー！」

あると、橋くんが白い布を私の口にやつた。

それからいのじとは、覚えていない。

でもまちがいなのは、あの白い布は催眠薬がたくさんしみこませていたにたがいなかつた。

私がもつりゅうと、しつかりすればほんとにまなづかなかつた。

私は、真紀だけではなくタイチくんまで裏切つた。

あのあと、すいご悔やんだ。

真紀は家を出で行へし、心はなぜか夜まで帰つてこなくなつた。。

私は一度に2つの宝物を失つた。

「めんね・・・。真紀・・・。タイチくん。」

## 第35話 タイチくん

「まあ、レーベルの事などない。」

ナギちゃんは、無理に笑った。

「ナギちゃん……もう、無理しないよ……。」

心は、涙をためていた。

「……」

「やつだよ。よかつた、ナギが本当のことを話してくれて。」

真紀も微笑む。

「いわんね。真紀ちゃん、」

ナギちゃんは、安心したのかやつと本音が出た。

「戻つておこでよ。」

心は、ナギをなだめる。

「あつがとわ。」

ナギは「これまで見た」とのない笑顔を見せた。

すると、"ピンポーン"とチャイムが鳴る。

「待ってて！たぶん、ショウだと思つ。」

心は、なんか軽い気持ちでなんかやつと晴れた。

「はあーい！！」

玄関を開けると、やつぱりシヨウだつた。

「ショウー！待つてたのー！」

「あれ？？なんか機嫌いい？？」

シミウは、微笑んでる。

「あー今日、俺のいとこ連れてきた！」

よく見ると、隣に背が高く、歳は・・・・ナギちゃんと同じくらい?

「こんばんわ。あの、最近ショウが反抗しなくなつたのでどうしたのか問い合わせたら、彼女が

いぬひて聞いたから、会いたいなあと思つて！」

その人は、気はよさそうな人だった。

「あー、どうもー。」

心は、その人も家にあげた。

「あの、名前は？」

「あ・・・名前ですか・・・? 2種類ありますして、名前は”タイチ”っていこます。」

「…」

（タイチってナギちゃんがいっていた人? まさかね、ショウと私が親戚なはずないし。）

と疑つた。

「ねエ、今日誰かいんの?」

ヒシリウが心にさく。

「うんとね、ナギちゃんと真紀ちゃんがいるよ。」

心は、リビングに案内する。

「だから誰だよ・・・。」

心は、ショウの言葉なんて聞いてなかつた。

「ねエ、真紀ちゃん、ナギちゃん。一度は紹介しようと思つてたんだけど、私の彼氏の

”ショウ”私の1つ年下なんだ。。。あと、ショウのことこの人來てるんだあ。」

とコビングにショウが入ってくる。

「あの・・・こんなにちわ。あの、おれ”ショウ”といいます。」

と礼儀正しくあこがつした。

「あれ?」  
「は?」

「なんか忘れ物したんだって。あとで来るよ。」

ナギと真紀はキョトンとしている。

「・・・どうしたの? 2人共。」

「いや・・・かわいいなあ。つて」

「それは、いいから2人も自己紹介は?」

と少し大人っぽくふるまる心。

「あ・・・えつと、心の姉の”真紀”といいます。」

と真紀は、恥ずかしそうに言つた。

「あとそれから私は、心の母の”ナギ”です。よろしくねー。」

とまた口調がかわいくなるナギ。

「宜しくお願ひします。」

シコウも緊張している。

「あれ？ おやいね。。。シコウのこと？」

と心せめ、玄関のまづみをみる。

「うん・・・だよな。どうしたのかなあ？」

シコウも心配する。

「え？ ～～のこと」ってか？ ここ～～？」

とナギは期待している。

「むう～～ナギちゃん～～」

心は、あきれる。

すると、玄関の開く音がした。

「すみません。ちょっと、ケーキを忘れてしまつ・・・」

シコウのことこのタイチさんは、何かを見て驚いていた。

心せめ、家の田線をたどると・・・

「・・・タイチ・・・へん。」

「・・・ええ？ ？ ？」

心と真紀はおどろいた。

(「…人が…私のお父さん…。」)

## 第36話 愛する

「…………ナギちゃん？」

タイチはこきなつの」と驚いた。

「…………じうじゅ。」

ナギちゃんのあのときの顔は忘れられなかつた。

いかにも、満ちていても満たない顔……。私のときと一緒にだつた。

「なんで」「こんだよ……！……俺がどんだけ探してたかわかるのか？？？？」

タイチは激怒していたかと思つて、こきなり安心したかのような笑顔になる。

「…………めんなさい。」

ナギは下を向き、泣いている。

「じつしたんだよ。。。なんで、俺のことを置いてこつたんだよー。」

タイチは、優しくナギを抱きしめた。

ナギは、昔のことを全て話した。

「…………。」

タイチは、ちやんと真剣にナギの話を聞いていた。

「……じゃあ、とゆうじょの2人は俺の……子供?」

「うふ。1番田は真紀、2番田は心。」

少し照れ笑いをしてくる。

「……あんまり実感わかないなあ。だつて、どう見ても兄弟な感じすんじやん?」

でもタイチも嬉しそうだった。

すると、シロウは心の耳元で佗をやいた。

「今日は、2人きつこさせたら?」

「うふー。やうするー。」

心とシロウと真紀は、家を出た。

「あーあーーああゆうのつていいなあ。。。私も彼氏のといひに床わづかなーー！」

と後ろを向き、笑顔で手を振つて真紀ちゃんも戻つていった。

「じゃあ、俺たち・・・行く?」

「じゃあ、俺たち・・・行く?」

ショウは照れながら呟く。

「じゃあ……わざわざつかな。」

心は、ドキドキする、

「行くわ。」

ショウが私の手を繋いでくれたとき、心がホットした。

（どうしよう……。）のまま、ショウの家に行つてなにもないまま帰つてこれるわけが

ない。どうしよう……。私初めてなのに！怖い。すうい不安。でも、大丈夫かなって

思う。。。。ショウとなら……。）

心は、そんなことを思つてゐる間にショウの家に着いた。

「どうだ？。」

ショウは、普通どうりに鍵を開ける。

（私だけなの？こんなにドキドキしてんの。）

やつ思つと、恥ずかしくてショウがなかつた。

心はギクシャクしていく、ソファーに座る。

「ねえ僕、先にお風呂はうつていい?」

ショウのこわなつの言葉に心はまた変な態度をとった。

「え・・?・?・?・?」

心の顔が赤いのを見たショウは少し笑った。

(鼻で笑われた・・・)

心はショウがお風呂に入つているときには携帯を出し、アキに電話をかける。

「・・・あ。もしもし?アキ?私・・・なんだかど。」

いきなりの心の電話でアキも驚いてくる。

「え?・?・?・?」

「うんと・・・・・・実はりあ、今ショウの家にこもるんだが・・・  
。泊まるひとになつて。」

心の顔は少しおびえてるかのよつとも聞こえる。

「・・・・・・ショウくそつて・・・・鬼畜だね。心を襲うんでしょ?・?逃  
げなよ!・・・あの男はやばい!・

あんな最低な男やめておきなー!」

アキの意外な言葉に心はキレた。

「あのね！－シヨウは、鬼畜なんかじゃないの！－－私だって、少しは期待してたんだから！」

すると、電話からクスッと笑う声がした。

「・・・・アキ？」

（もしかしてわざと・・・・）

「・・・・アキちゃん？」

心が言つても何も答えない。

「言えたじやん。口の本音。・・・」

アキはそうつづて電話をきる。

そうか・・・。そうだよね。

なにもかも思つままにすればいいんだ。

ショウのこと・・・・好きだから。

### 第37話 愛しい人

「あ！・・・・いた。」

ショウは、お風呂から上がってきた。

「え？・・・いやだめだつた？」

心は、少し不安になる。

「ううん！」「大好き！..」

ショウが心に抱きつく。

そりやあ、怖かつた。1人でショウのこと受け入れられるかすゞい不安だつた。。

だつて、好きでもかかえきれなものつてあるじやん？

今、なんかドキドキしそぎて足が震える。

「どうした？」「..」

「・・・今日は・・・一緒に寝るの？私は・・・1人で寝たいなあ。」

心は、顔を赤くしてショウに言ひつ。

「・・・俺は、どうちでもいいや。」

ショウははなにかんで、冷蔵庫をあけてジュースを飲んだ。

心は、お風呂に入る。

やつぱり・・・ショウの「と今まで傷つけたかな?

ショウのことわざ「よく大好き。

でも、それだけじゃダメなのかな?

手を繋ぎたいとか、キスとかはたくさんしたいって思つたの? その先は

死ぬほど怖い。

心は、お風呂から上がった。

リビングに行くと、ショウがいる。

「ねえ、ベットがいい? それとも布団がいい?」

ショウは、笑う。

でもその笑顔は無理して作つていて。

「・・・布団がいい。」

心はなんだか情けない気持ちになる。

「・・・じゃあ、ここに敷いておいたから。」

シヨウセ、止むなく自分の部屋に行ってしまった。

「…………」

心は、悲しい気分になつた。

心は、シヨウウが戻ってきた。

「どうしたの?」

心が聴いた瞬間……

「ハハ、おやすみ。」

ほっぺたにキスした。

心は、こきなつのことでもないこた。

「じゅあー。」

シヨウセ、本当に戻ってしまった。

心は、キスされたほっぺたをおさえた。

「ごめんね。シヨウウがのぞんでる」とでも言ひはない。

「私、シヨウウのこと好きだけじゃない。」

怖いよ。。。

心は、やつ思いながら布団にまつた。

でも、寝れない。優しいショウのにおいがしたから。

するとい、携帯がなつた。

メールが来ていた。内容をみると『さやかにからだつた。

』『さやかんー本当に2人きつこにしてくれてありがと。』

今、すごい幸せだよ。また、愛しい人と愛し合える。私にとっての最高の

宝物。『さやかんも大切なひとのひと自分から離しちゃだめだよ。ナギ』

「・・・ナギ・・・さやん。」

心は、急にショウが愛おしくなつた。起きあがつて、ショウの部屋に入った。

「ショウ?」

ショウをみると、あじけなく寝てこる。

ふと、ショウの手をみると心の『真を持つてこる。

「・・・ショウ。」

涙が止まんない。

「ショウ……起きて……。」

心は、大声を出した。

「……んん？」

ショウは、電気スタンダの電気をつけ、めがねをかける。

「どうした？」めん、氣づかなくて。」

「……ショウ、好き。大好き。すげ悲しくて、さみしくて。」

「□□……。」

ショウは、心を抱きしめた。

「一緒に寝る？」

「うん。」

心は、うなづいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2348b/>

---

翼のおれた天使

2010年10月15日09時12分発行